

翻 訳

## 人生という本の余白に書き込む（続き）

『写在人生边上』 錢鐘書 著

張 新 力（訳）

小 栗 友 一 鹿 又 玲 子（校閲）

キーワード：食べる，説教，イソップ，偏見，文盲，文人

### ご飯を食べる

食事をすることは、時には結婚に似ていて、表面上もっとも重要なものが実は往々にしてその付属品にすぎない。凝った食事を食べるときは、唯おかずだけを食べる。まるでお金持ちのお嬢様を娶りたいと思う本意はその女にないのと同じである。この主権無視のやり方には回りくどくて、しかもあまり素朴ではない人生観が含まれている。飢えを凌ぐためではなく、味を楽しむのが、我々の食事の目的になってしまった。舌が胃腸に成り代わって最終的または最高の審判を下すのである。しかし、我々はやはり需要という名で享受を隠し、おかずを食べると言わず、ご飯を食べると言う。まるで哲学や芸術を研究する人がいつも真と美が利用できると言っているのと同じである。つまり、有用なものは人に利用されるために存在し、逆に、無用なものは人を利用し、人がそれを覆い隠したり弁護したりすることによって、捨てられることを免れるというようなものである。プラトンは『国家』の中で国家が三種類の人からでき、それぞれは魂の三つの部分に等しいと言った。飢渴、飲食は魂の最低の部分であって、政治組織の中の平民と民衆に相当する。もっとも巧妙な政治家はいかに民衆をごまかすのかを知っているから、自分の野心を民衆の意志や福祉と偽る。人々はレストランに人を招待するとき、料理を楽しむためにもかかわらず、いつもご飯を食べるという名義を借りる。これはまさに舌のお腹に対する口実で、あたかも「文句を言うなよ、君の分もあるから。君は名誉をいただけば、俺が君のために頑張るか

ら、損しないだろう？」と言っているようである。実際はどうだろう。神様は知っている——空いた腹はもっと知っている——飢えを満たすためだけなら、樹木の皮も草の根っこも肉や魚と大差がない。消化と排泄という生理プロセスの中でそんなにたくさんの政治的働きが必要であるとは神様でも思いも寄らなかった。

古代ローマの詩人ペルシウスは腹が人間の天才を発展させ、人間に技術を伝授したと慨嘆した。この考えはラブレーによって余すところなく展開された。彼の『ガルガンチュワとパンタグリユエル』に腹を賛美する章がある。尊い人類の主宰者も、各種学問と職業の創始者と提唱者も、飛んでいる鳥も、走っている獣も、泳いでいる魚も、地を這う虫も、すべての生あるものの活動は胃袋のためである。人類のすべての創造と活動（文章を書くことをも含めて）は頭脳が充実していることを表わしているだけではなく、胃腸が空虚であることをも証明している。飽満した腹はもっとも役に立たない。なぜなら、腹が飽満している時の脳はぼんやりしていて、非現実な夢を見る以外何もできないからだ。昼食を食べた後昼寝する、という不文法の存在がその有力な証拠である。われわれは飢餓を最低と考え、それが乞食、盗賊、娼婦のたぐいを産出したとしか見なかったし、飢餓が思想や技術、また「全体に食を与えよう」という政治経済的理論を喚起したことを忘れた。ドイツ近世の詩人ブロッケスの賛美歌は神さまを「一人の偉大なコックさん」にたとえ、全人類に食事を作ってあげながら、宗教的な雰囲気も漂わせている。しかし、食事を作ってくれる人は我々の本当の主人ではない。このような神さまにはならなくても良い。彼に食事をもたらした人こそが、われわれの行動の支配者である。たとえば、一家の主人はお金を稼いで家族を養っている父親ではなく、乳臭くて、食事を待っている子供たちである。この点は子供のころは意識していないし、父親も絶対認めたくない事柄だ。ラブレーの言葉には一理がある。考えてもみたまえ、腹は朝から晩までわれわれに茶飯を供えることを要求しているのだ。このような腹が神さまでなくて何だろう。しかし、腹はあくまでも卑しくて表舞台に出せないもので、納入と吸収しか知らず、享受と鑑賞を知らないやつだ。それゆえ、人生も複雑になってしまった。世の中には、胃腸があって、飯をあてがわなければならない人がいる一方、飯があるから、それを食べて胃腸で消化しなければならない人がいる。前者の人生観は飯を食べること、後者は料理を食べることと言っても良いであろう。前者は働いて、ものを生産したり、創り出したりして、飯を稼ぐ。後者は前者の創造した成果を利用して、食欲を刺激して食べる量を増やしていく。そのために食事の時に音楽を聞いたりする。それでも物足りないと思ったら、「美人」や「麗人」に酒をついでもらったりする。もう少し上品にするには、暖を求める会や暑気払いの会を開き、席上で名人の書や絵を回覧する。さらに、花や景色を愛でながら食事することすらあり、自然や名所を肴にする。料理は言うまでもなく最上級に拘っている。舌はもともと体と同じくらい気軽に自由

## 人生という本の余白に書き込む（続き）

なものであったが、ここまで物質的に裕福な環境に置かれると、上品さをぶる。前に食べなれたものでも、いま食べるとなればまるで味がされるかのように、決して口に入れようとしない。ここまで拘ると、少なめに食べれば良いのに、逆に食べ過ぎてしまう。もしも腹に決めてもらうならば、腹いっぱいになれば十分だし、程よく止めたに違いない。舌はあれこれ選び、口は命を顧みずむさぼり食い、結局、腹がついていけずたいへんな目にあう。用心して食べないことにすると、舌は李逵のように「肉が食べたい」と言うだろう。これは舌が肥えて本来の役目を忘れた報いだ。こうして見れば料理中心の人生観は妥当性に欠けている。

ところで、口当たりの良い、おいしい料理は賛美する価値がある。この世界は人間によって狂わされ、至る所に摩擦と衝突が起きているものの、もっとも調和のとれたものも——音楽と料理の二つだけだが——人間によって造られたものである。一皿のうまい料理はまるで一曲の楽曲のようで、ある種の一貫性のある多元的なものである。味を調味することは、相反する分子を別々に出すことができても、互いに補足、補完させ、一体不可分にするものである。もっとも簡単な例と言え、蟹にお酢、北京ダックに甘味噌、西洋料理のローストポークにリンゴジャム、味付けした鱈とレモンなど、もともと遠く離れた全く関係のないものなのに、なぜか定められた縁があるようで、まるで才子と佳人、メス豚と皮膚病にかかった象のような、神様に決められたペアに、両両相まって素晴らしい家族にと結ばれた。今となっては、彼らは親密すぎて、離そうにも離すことができない。調味に関しては、ライブニッツ哲学の「予定調和」があり、と同時に絶対に妥協できないものもある。たとえば、胡椒とゆでエビゆで蟹、甘酢と牛肉羊肉はまるで中国の古典音楽の商と角、徵と羽（商、角、徵、羽は音階のこと）が調和しないのと同じようにつりあわない。音楽の道理は調理にも通じる、と孔子は知っていた。ゆえに『論語』に齊の国で「韶」に聞きほれ、「三か月肉の味も判らなかつた」と記してある。彼は『郷党』で料理についてかなり拘りがあつたにもかかわらず、三品もまだ食べ終わらないうち、二種類の調和のなかで音楽に偏ってしまった。たとえば『中庸』が心身の修養を説明した際「(喜怒哀楽が)発してすべて節の中(あた)る、これを和と謂う」と言い、音楽によって人格を養おうと勧めた。まさに音楽を聴いて肉の味を忘れる人の言うことだ。我々の考えによれば、完璧な人格は「我が道」が「一つのこと」で貫かれている。完璧な支配者は国家の支配に当たり、音楽のような調和を取るだけではなく、調理のような調和も理念に掲げるべきである。この点について、我々は孔子に追随せず、人々に忘れられた伊尹を崇めたい。伊尹は中国最初の哲学的料理人だった。彼の眼には世の中はまるで料理を作る厨房のようなものであった。『呂氏春秋・本味篇』には伊尹がスープの味を長々と説明する文章があり、彼はもっとも偉大な政治哲学を人の涎を誘うメニューに譬えた。この考えは中国古代の政治意識に浸透していた。ゆえ

に、『尚書・顧命』以来、宰相はいつも「和羹調鼎（肉の調理者）」に譬えられた。老子も「治国は小料理を調理する如き」と言った。孟子は伊尹を「聖之任者」、柳下恵は「聖之和者」と称賛した。両者が使った表現はいささか違うが、柳下恵は人々が裸で向き合うのを認めているから、放「任」主義者と言えるだろう。けれども、伊尹には「和」の字がふさわしいと讃えた。この「和」にはもちろん厨房に入り、炊事にかかり、味を調味する意味もあったであろう。

食事することは社交的な効能もある。たとえば、付き合いを深めたり、商売の話をしたりするなど、その場合「ご飯を奢る」になる。社交のための食事は名目が複雑だが、本質はすこぶる簡単である。すなわち、飯が食べられる人間に食べさせるのは奢りで、自分にたくさん食べ物があるのに、他人の飯を食べに行くのはメンツをたてることである。交際の妙にほかならない。逆にいえば、食べ物のない人に飯を与えるのは施しになり、食べ物がないから他人の飯を食べに行くのはメンツをたてることから恥をかくことへと変わる。これは慈善救済で、交際ではない。食事を奢る時の人数や男女の比率についてはまた場を改めて述べる。面白味溢れる『大食い年鑑』の妙味ある一節にここで言及しないわけにはいかない。この八冊からできた貴重な本はご飯を食べることを研究したものだが、人に食事を奢ることに触れた。おおよその趣旨は次のようである。つまり、誰かに御馳走してもらったら、陰で口はしばらく止めるものである。その期間がどのくらい続くかは、食事の質によって決まる。だから、人々は時々人を御馳走に招待し、そして、なるべく良い料理を食べさせ、友情を深め、敵の誹謗を減らすのに努力すべきである。私は誠心誠意上記の言葉を、友人と仲違いしたくない人と、友人と仲違いしかねない人に勧める。私自身については諸君のお招きをお待ちしており、猪八戒が南山大王の手下の妖怪たちに言った「引っ張らないで、私がゆつくりと食べてから行くまで待ちなさい」という言葉を頑張って実践していこうとしている。

## イソップ物語を読んで

我々より若い人と言えば、だいたい二種類に分けることができる。一つは我々より年がだいぶ離れている後輩であって、我々は彼らを容認でき、また喜んで守ってあげられる。我々は彼らに対して年長であることを誇示でき、尊厳さをも増す。もう一つは我々より年が少し若い人である。この人たちは我々の忌み嫌う感情や嫉妬を引き起すだけである。彼らは最早敬老の観念を喪失しているし、我々もまた彼らに憐憫の情をおこさせるほど年をとっていない。我々は年を誇示できないだけでなく、彼らの真似をして若さを全面に出す。年齢は我々に損ばかりさせている。この二つの態度が至る所に見られる。たとえば、

三十近くの女性は十八、九歳の女の子の容貌を褒めることができても、二十三、四歳の女に対しては容赦しない。だから、子供はいつも大人に可愛がってもらえる。そのため、大きい子と小さい子の間の衝突は免れない。人間関係、とりわけ年功や資格の上下にかかわるすべての関係は、この分析の正しいことを証明している。

歴史を全体的に見れば、古代は人類の幼年期に相当する。最初は幼稚ではあるが、何千年、何百年の成長を経て、今日に至ったわけである。時代が古いほど前にあるから、その歴史も短い。時代が新しいほど、蓄積した経験も多く、年齢も高いと言えよう。こうして見れば、我々は逆に先祖の先輩ということになる。古代より現在のほうが悠久なのである。したがって、我々の古代を信じ、古代を好む態度には新たな意義が生まれてくる。我々の古代への思いは必ずしも祖先を尊敬しているわけではなく、ただ子供を可愛がっているだけかもしれない。敬老のためではなく、経験の多いことをひけらかしたいのかもしれない。自分が、衰えた頑固爺と認めたい老人はいない。我々が現代のすべてを信じているのは、現代が価値的にも品格的にも上代より進歩しているからである。

これらの感想はたまたま『イソップ物語』を読んで思いついたのである。『イソップ物語』は実に読む価値のあるものである。この本は少なくとも三つの角度から我々に安らぎを与えてくれる。第一に、それは古代の本であって、読むことによって、我々の現代の文明に対する誇りを深めてくれる。第二には、それは子供の読み物で、読むことによって、我々はもう大人なのだから、そんな幼稚な見解を超えていると思わせる。第三には、この本のほとんどが動物の話で、動物から人間への変化にはどれだけの進化の過程が必要であったかがわかる。物語のなかの蝙蝠や狐の言動は、立身出世をした後、貧乏な友人を訪問し、故郷に錦を飾ることを思わせる。しかし、貧乏な友人は我々の援助が必要であり、子供の教育も我々がやらなければならない。だから、『イソップ物語』の中には浅はかな見解もたくさんあり、改める必要があると思う。

たとえば蝙蝠の話：蝙蝠は鳥に出会ったら鳥を装い、野獣に出会ったら獣を装う。人間は蝙蝠よりはるかに賢い。人間は蝙蝠のやり方を逆手に取る。つまり、鳥の前では獣に変わり、地に足が着いていることを表わし、獣の前では鳥に変わり、非凡である事を表わす。武人に風雅をひけらかし、文人には英雄だと装い、上流社会では貧乏で硬骨な平民を演じ、平民のところでは腰の低い文化人になる。こういうことができるのはもちろん蝙蝠ではなく、人間しかいない。

アリとキリギリスの話：アリは冬に貯蓄した米粒を出して干すが、キリギリスはお腹が空いて死にかけていた。アリに米を貸してほしいと頼むと、アリが「夏に歌を歌いながら遊んでいたのはあなたでしょう。今になって食べ物がないなんて、いいきみだ！」と言った。この話は続きがあるはずだ。プラトンの対話編『パイドロス』によれば、キリギリス

は進化して詩人になるのである。これに従っていけば、貧乏な詩人が飢えているのを傍観し、お金を貸し惜しむ人は前世がきつとアリなのだ。キリギリスが死んだら、その体はアリの食糧になる。同じように、生前自らを養えない作家が死後たくさんの人を養っている。たとえば、彼を偲ぶ文書を書く親戚や友人、研究論文を書く評論家や学者。

犬と自分の影の話：犬は肉を啜えて橋を通る時、水に映った自分の影を見て、もう一匹の犬が肉を啜えていると思い、口に銜えた肉を放して影と喧嘩しはじめた。影の口から肉を取るための争いだったが、結局、自らの肉を落としてしまった。この話はずっとと貪婪を戒めるためであるが、今はほかの意味に使うことができる。つまり、人々は鏡を持つ必要がある。時々自らを映し、自分がどんなものかを知っておくべきである。しかし、自らを知る人には鏡なんかは必要としない。逆に、そうでない人は自分を鏡に映しても何の役にも立たない。肉を啜えた犬のように、鏡を見ると、吠え暴れ、自分の影を攻撃の対象としてしまう。こうして見れば、一部のものは自らの姿を鏡に映さないほうが良い。

天文学者の話：天文学者が空を仰いで星を観察していたら、足を踏み外して井戸に落ちてしまった。「助けて」と大声で叫んだら、隣人が聞きつけて「高いところばかり見て、足元を見ない罰だよ」と笑った。足元を顧みず、高いところばかりを見ていた結果として、時には井戸に落ち、時には下野か失職かである。しかし、落ちていても、決して自分の不注意を原因とせず、所轄部門の調査などをしたとしか言わない。たとえば、この天文学者にもちょうど良い言い訳——「井の中のかわず」——があったと言える。まったく、落ちた後でも目は上を見つづけているのである。

カラスの話：神様はもっとも美しい鳥を鳥類の王に決めようとした。カラスはクジャクの長い羽毛を身に纏い、しっぽにもクジャクの羽毛をつけ、神様のところへ応募に行った。果たして神様に選ばれたが、他の鳥たちが怒り、カラスの身につけた羽毛を全部引き抜いた。カラスは本来の姿に戻った。つまり、髪を長くしている者が必ずしも芸術家ではない。逆に禿げた人が必ずしも学者や思想家ではない。考えてもみたまえ、何も生えてこない頭から何が生まれてくるのか。この寓話はこれで終わったわけではない。カラスは借りてきた羽毛を全部抜きとられ、元の姿が現れた後、恨めしさと恥ずかしさで怒りだした。いつそのこと、皆自分の生まれつきの羽毛をきれいに抜いてみようじゃないか。皆裸になって、クジャクや白鳥らがカラスとどんな区別があるかを見ようじゃないか、とカラスは提案した。こういう自分の恥を取り繕う手法は少なくとも人間がよく使うものである。

牛と蛙の話：母蛙はめいっぱい体を膨らませて子蛙に聞いた。「牛ぐらい大きいでしょう?」。子蛙は「もうこれ以上膨らませないで、お腹が破裂したら大変!」と答えた。この母蛙は本当に馬鹿だ。牛と大きさを比べるより、可愛らしさを比べれば良かったのに。だから、すべての欠陥にはそれを埋め合わせ手がある。吝嗇を経済的、愚かを誠実、卑怯を

機敏，才能のないことを徳だと表現するのがそれである。ゆえに，世には自分には取柄がないと思う女性はいないし，他の人に及ばないと思う男もいない。このように，各自がそれぞれの言い訳を言うから，お互いの間にいざこざなく平和に暮らすことができないのである。

おばあちゃんと雌鶏の話：あるおばあちゃんが一羽の雌鶏を飼っていた。毎日卵を一個産む。おばあちゃんはそれだけでは満足できず，一日に卵を2個産んでほしいと思い，餌を倍にした。ところが，雌鶏は餌を食べれば食べるほど肥え，卵を完全に産まなくなった。食欲の戒めである。しかし，イソップは間違っている。彼は「デブは往々にして度量が狭い」と言うべきだ。

キツネとブドウの話：キツネは見事に熟れた葡萄を見て，食べようとしていろんな方法を考えたが，とうとう届かずに諦めた。そこで，彼は「この葡萄はまだ酸っぱい，食べないほうがいい」と自分を慰めた。たとえ，彼がこの葡萄を口にしたりしても，「この葡萄はやはり酸っぱい」と言うかもしれない。なぜならば，もしこの狐がなかなか満足しにくいやつだったら，自分には葡萄の味が「思うほどではない」と思い，逆に，満足しやすいやつだったら，その味に満足して，他の狐が葡萄に近寄るのを止めることができ，葡萄を独り占めできるからである。

ロバと狼の話：ロバが狼に遭遇し，慌てて足を怪我したふりをし，「私の足に刺さったとげを抜いてください。そうしなければ，私を食べた時，あなたの舌に刺さるから」と狼に言った。狼はほんとうだと思い，一心不乱にとげを探しはじめた。ロバは狼を手痛く蹴飛ばして逃げてしまった。狼は「神様は私に殺し屋として命をくれたのに，なぜ医者になろうとしたの」と嘆いた。この話は可笑しいほど幼い。医者も一種の殺し屋であることを知らないからである。

これらの例から『イソップ物語』は現代の子供の読み物にするには適切でないと分かる。ルソーは『エミール』巻二の中で，子供が寓話を読むのに反対している。子供の心根を悪くするからというのである。狐がカラスの啜えた肉を騙した話を例にすれば，子供が読むと，騙されたカラスに同情するのではなく，上手に騙した狐を羨ましく見る可能性がある。本当にそうだったら，子供の心根がもともと良くないと証明できるではないか。子供が寓話を読むべきかどうかは，大人たちが子供のためにどんな世界，どんな社会を作ってあげるかによるものである。ルソーは寓話は純真な子供を複雑にし，純粋さを失わせかねないから，読ませてはいけないと考えている。私が子供に寓話を読ませない理由は次の考えがあるからである。つまり，子供が寓話を読むと，ますます単純になり，ますます幼稚になり，世間のことはすべて是非がはっきりしていて，善と悪の報いも動物の世界のように公平で明瞭に行われていると考えてしまうだろう。そのまま大人になったら，ひどい目

にばかり会うことになる。ルソーは尚古主義者で、復古を主張している。しかし、私は人類の進歩を信じている人間だ。——寓話の中の蠅のように車輪の軸に座り、ぶんぶん「車が前進できるのは全部私の力のお陰だよ」とまでは言わないが。

## お説教について

汚れを嫌うということは清潔好きということになる。清潔好きの人は入浴するわけでもなく、絶対他人の入浴道具を使いたがらない。清潔と不潔の分かれ目は結局他人と自分の区別にある。自分が清潔だと思っている人は常に他人が汚いと感じている。たとえ自分が汚いと思ったとしても、他人よりは清潔で気持ちが良いと思い、時々汗にまみれて、ひどい口臭をしても、他人のタオルと歯ブラシを借りようとはしない。もちろん、人に恋人を譲っても、タオルと歯ブラシを人に貸そうとはしない。こうして見れば、我々の清潔好きなるものは自愛に過ぎない。「世俗に同調せず孤高を持する」(潔身自好)という成語は心理的に人を深く観察していると思う。実を言うと、世の中のことには是非、善悪、正邪等の違いはあるが、それは時には人と自分との違いで、まさに体の汚れと同じである。だから、自分がいい人ぶろうとする時は、まず世の中の人を悪者にし、自分が道学者だと気取る時、まず厳しい顔をして、他人のことを非道、または似非道学者だと言う。ここまで言うと、思わず『聊齋』の中の女鬼が狐に言った言葉を思い出す。「私のことを人間ではないと言うのなら、あなたは何なの？ 人間なの？」

世の中に、自ら進んで人類の師にならんとして、毎日文章を書いて人類を教え諭す人がなぜこんなに多いのか、いつも不思議に思う。「人間という動物」(That animal called man), すべてを抹殺できずに、意外にも自分を犠牲にし、我を忘れる人がまだ残っている。さらに不思議なのは、人類を教え諭す人がこんなに多くいるのに、人類は少しの改善も見られない。まるで、世の中に多くの医者がいて、仁愛の心と高い医療技術をもって治療しているのに、疾病がまだなくならないのと同じであろう。医者は病気を治してはいるが、同時に人が病気に罹るのも期待している。苦い薬を調合し、高い値段で売らなければならないから。人の命を助けることは医者自らの命を助けることにもなる。薬を飲んでくれる病人がいなければ、自分は食っていけないからだ。だから、論してくれる師がいるのに、世は一向に改善が見られないのもおかしくない。人間性は改良できないものでありながら、それを変えようとしてお説教する人が現れるのは味わい深いものである。しょせん人間は教え諭せるものではない。お説教するような文章は人にも世にも実用的ではないが、必要性がある。まるで病気に罹ると医者に診てもらい、治らなくても、かならず薬を飲むのと同じである。もし人類が本当に好學で、お説教される必要がないようになったら、大勢の

## 人生という本の余白に書き込む（続き）

人が暇で堪らなくなってしまうのではないか。そこで、人生の責任から評論家の態度まで、次から次へと、青空伝道場のような文章が出てくる。文章はあまりお金にならないが、どうせ紙も墨もそう高いものじゃないから。

人生半ばの人は道学的なお説教と密接な関係がある。作家だけを観察してもこの面白い事実が発見できる。文人の多くは四十歳ぐらいになると、突然救世主に変わり、眼の前のすべてを悪いように言い、世直しの責任を担ごうとする。マシュー・アーノルド、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスや現代のトマス・スターンズ・エリオット、ジョン・ミドルトン・マリーなどは良く知られている英国の例である。耽美的なオスカー・ワイルドでさえ、死ぬ前に仏心を起こして、社会主義を唱えている。もう少し例がほしいなら、友人の中からも見つけられる。このような尊敬すべき変化は目的がとても純粋で、世界を救い、人類を教育するためだけにある。しかし、純粋な目的には複雑な動機があることも避けられないだろう。道理を厳しい言葉で声高く叫ぶのは、文学的創造力の衰退を隠すためか、絶望した人生に対する怒りなのか、職種を変えるための試みか、中年が若者を嫉妬しているのか、などであろうか。その嫉妬は、中年女性が容色が衰え、化粧ののりが悪くなると、自然に社交を減らし、専業主婦に甘んじていながら、若い女性の奇妙な身なりが気に入らないのと同じである。シュール・ジャナンは、バルザックは40歳の女性を発見したコロンブスだと言っている。40歳ぐらいの男性はまだ発見されていない。孔子でさえも中年の特徴を把握していなかった。ゆえに、『論語・季氏』に人生の三戒：少年好色、壮年好戦、老年好利という三つの特徴を記したが、中年はお説教を好むというのを言い忘れた。もちろん、小さい時からお説教や伝道が好きなの人もいるが、それらの人は生まれたときがもう中年であったと言うしかない。60歳になれば、もう90歳か100歳として祝うべきであろう。

いかに借金を踏み倒せるかを金銭管理としている人がいるように、人を説教するためだけに道学を説いている人もいる。古書には「直言」を受け入れられる人は「善人」だと記されている。この見解は平凡で浅はかである。本当の善人は、施すだけで施されはしない、人を説教するだけで、人の説教を聞かない、これこそ「献身的な精神」である。

芸術的な人生観から道学的な人生観へ変わるのが人生の新しい時期の到来と言えよう。しかし、新しい時期の開始は同時に前の時期の没落とも言える。たとえば、仕事をしている人間にとって、朝食は一日の開始で、お腹いっぱい食べて仕事を始める。しかしまた、徹夜して麻雀やダンスをする有閑階級の人にとっては、朝食は宵の終わりで、空腹を満たしてぐっすり眠る。道徳を説くことの出現は文学創作の死を意味しているかもしれない。私は双方のうちどちらも褒め、貶すつもりもまったくない。お説教と文学創作、どちらの価値が高いかは、人によってまったく違うからである。一部の文学創作はまるでお面をかぶったお説教で、ストレートに道学を唱えたほうがマシだと思う。逆に、一部の道学は無

を有とし、似非を真とすることができるので、詩や小説、うわさ話や作り話と同じく創作として扱っても良いだろう。

道徳的でないのに他人を説教するのは似非道学者だ、と頭の単純な人は言うかもしれない。似非道学者でもいいじゃないかと私は思う。似非道学者は本物の道学者より貴重だ。徳性がある人を見習うのはなんの変哲もない。しかし、徳性のない人が道徳を以て人を教え諭すなら、そこに手腕が見られる。学問を以て教壇に立つのは当たり前のことだが、学問がないのに、教壇に立って教えるのは、まるで元金がないのに商売をやっているようで、それこそ芸術だ。真の道学者が道学を唱えるのは、まるで商店が在庫品のために広告を出すようなもので、自己標榜的になりがちである。全く道徳性のない人が道学を説くところこそ無私的で、人助けのお人よしで、道徳の偉大さがますます証明される。さらに深く言えば、本当に道徳のある人に道徳を吹聴してもらおうと、逆に自ら持っていた道徳を徐々に喪失してしまう。ラ・ロシュフーコーの『削除された箴言』第589条は「セネカのような道学者たちの説教は、人類の罪悪を減らしたわけではなく、他人に説教することによって、自分の誇りを高めた」とする他人が良くない、教え諭さなければと思うと、無意識のうちに身構える。最初は、相手には理想が欠けていると言っているが、徐々に自分自身こそ理想の人物だと思うようになり、相手に自分を見習うように強いる。才学を以て誇る人は、その誇りによって才学をなくすことがない。貧賤を以て誇る人は、その誇りによって裕福になることもない。しかし、道徳と誇りと両立できるものではない。世の中でもっともひどい罪は残忍である。残忍ほどひどい罪はない。しかし、そのほとんどは道徳的理想を持つ者の仕業である。道徳のない人は自らの犯罪を犯罪だと承知している。道徳ある人が他人に損害を与えても、それは道徳のための代価だと思っているのだ。神様が人類を懲らしめようとする場合、自然災害をもたらす時があれば、疫病や戦争を起こしたり、また一人の道徳家を生まれさせたりする時もある。その道徳家は実現不可能な高尚な理想を抱き、そして、その理想の高さと比例する自信と扇動の才を伴い、知らず知らずに傲慢へと変わっていく。キリスト教の哲学は傲慢を七つの大罪の一つにしている。王陽明『伝習録』卷三にも「人間の悪は傲という字に概略できる。我すなわち傲で、諸悪のさきがけである」と書いてある。こうして見れば、真の道学は悪の初期段階に過ぎない。逆に言えば、似非道学者が道学を提唱する場合、似非のものを本物にしたり、習慣を自ら持って生まれたものに変えたりして、多少とも品行を本当に改善することもある。異性をからかっているうちに恋愛におちいり、模倣しているうちに創造へと発展し、風雅を装っているうちに本物の鑑賞家になったり、世にある本物の多くはまがい物から始まったのである。だから、似非道学は本物道学の学習段階だと言える。似非ものにしろ、本物にしろ、善行は善で報われる。真の道学者は死後天国に登って行くが、似非道学者は存命中から教壇に立っている。

なんと喜ばしいことではないか！

だから、説教する資格のない人がお説教するのは適任だし、似非道学を以て似非道学を攻撃することほど良い方法はない。似非道学の特徴は顔をさしおいてメンツだけを大事にしている。シェイクスピア戯曲に出てくるハムレットが婚約者に「God has given thou one face, but you make yourself another」と言った。似非道学は美容の芸術でもある。

ここまで書いて、はっと気がついた。この文章もお説教しているではないか。私自身も中年にかけ、人生の半ばまで歩んできた。白い紙に黒字、もう撤回不可能である。つべこべいうのはこの位にしよう。

## 偏見について

偏見は思想の休憩である。偏見は思想のない人達の日常ではなく、思想を持っている人達の日曜娯楽である。もし我々が偏見を抱え持つことができず、いつでもどこでも客観かつ公平、真剣かつ厳粛にしなければいけないのなら、それは、まるで家を建てる時に客間だけを造り、寝室を造らないのと同じく、また浴室で鏡を見る時でも、撮影する時のポーズを取らなければならないのと同じである。ダンテは『神曲』「地獄編」で「理を主張するのは小生一生の好みだ」と自称している。よって、地獄はかかる輩のために設けられたものだと分かる。人間は生きている間の言動をすべて理のためにする必要はない。まあ、正当な道理ももともとは偏見なのだ。生理学の常識によれば、人間の心臓の位置は真中ではなく、やや偏っている。おまけに、偏り方も時代に沿って、左のほうに偏っている。古人が辺鄙な道を「左道」と言ったのも科学的根拠があるように思われる。しかし、こうは言っても、多くの意見は禅宗洞山の『五位頌』が言った『真中に偏る』であり、学術理論などがその例だ。人生という本の縁に書いた随筆、熱愛している時に書いたラブレターこそ、正真正銘、徹底的な偏見である。世界は広すぎる、たとえ我々が目を大きく見開いていても、真正面から、まともに見ても、視野はやはり限られていてどうしようもない。犬が骨を狙っている時、そばに他の犬がいるのを顧みる余裕ないであろう？ いわゆる偏見というものは、射撃練習のように片目でものを見るのと同じである。ただし、これこそ事物の本質に的中するものの方だと思える人もいる。たとえば、プラトンは人類を次のように定義している。「人間というものは、羽のない両足を持つ動物だ」と、これ以上客観的な言い方はないと言えよう。しかし、ギリシアのディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』六卷二章によると、ある人がわざと毛を抜いた鶏を持ってプラトンに詰問しに行ったとある。ポーマルシェの『フィガロの結婚』の道化師が「人間は喉が渴かないのに飲み、年中性欲のある動物」と言っている。あくまで酒好きで好色な道化役のセリフだが、

このよこしまな論理は人類の本質の一部を言い当てていると認めざるを得ない。「偏見」という二文字はもともと関連がある。我々はものを見ているから、その見解には当然偏りが発生する。もしも我々が「人間は昼夜を問わず、寒暑を問わず、声が出せる動物」と定義しても、それはそれで一向構わないだろう。

禽類は春に囀り、コオロギは秋に鳴き、蚊は夏に雷鳴の如く羽音をたてる。夜になると虫は目覚め、鳥は眠るが、風雨は毎日訪れるわけでもない。人が現れなければ犬は吠えない。鶏は卵を産まなければ鳴き声で知らせない。言語を使い、動作をし、機械を使い、随時随所に声が出せるのは人間だけである。たとえ一人で部屋にいても、レコードを聞いたり、ラジオを聞いたり、寝る時でさえ雷のようなイビキをかく。言語は単なる音声ではないが、耳障りな声や聞きたくない声、或いは、壁を隔たった隣の声、離れていてはつきり聞こえない声には語の個性と輪郭が失われている。それは時には大きく時には小さくなる騒ぎ声の一团と変わり、鶏や犬の鳴き声と同じく意味が欠けている。これはいわゆる「人間の騒音」である。その騒音は人の睡眠を台無しにし、思考を中断させ、神経衰弱の症状へと育て上げてしまう。

この世界はしよせん人間が支配している。人間の声すべての声に勝っている。自然界のすべての音を集めても、二人が同時に話す時のにぎやかさには及ばない。少なくとも、第三者の耳にはそう聞こえる。唐子西の『醉眠』には「山の静けさ太古の如く」との名句がある。その太古は人類がまだ出現していない遠い古代のことを指しているのだろう。そうでなければ、山の上には和尚が住んでおり、山の麓には見物客が動いていて、峠に飯屋と茶店があり、山が静かなわけがない。「人間の騒音」は致命傷で、自然の音は静けさに溶け込めるものである。風の音、波の音と静けさとの関係は、風と空気、波と海水との関係と同じである。毎朝、東が明るみはじめ、夢の名残で目がまだ覚めていない時、我々は無数の禽鳥の挨拶の声を聞く。夜はまだ完全に明けておらず、静けさがまだ残っている。その間に諦めきれない夢を呼び戻す。数えきれないスズメの鳴き声は静けさを微塵につつき破ろうとしている。カササギの鳴き声は鋭い刃物のよう、コウノトリの声はしぶくて鋸のようで、どちらも静けさに刃先を向けている。しかし、静けさはどんよりとたゆたい、弾力性がある、禽鳥に破られてもまたすぐに元に戻る。暁を知らせる雄鶏の抑揚ある鳴き声でさえ、静けさに痕跡を残すことはなかった。徐々に、我々は鳥の鳴き声が静けさを破壊しているのを忘れた。静けさが鳥の鳴き声を吸収し、有声の静けさへと変わった。この時間聞こえるのは隣の赤ちゃんの泣き声、階上の咳、壁の外の足音だけである。静けさは朝日に会った霧の如く、きれいに砕け散ってしまう。人が起き、仕事をしはじめると、もう静けさを望めない。夜が更け、体が疲れた時や深く思考しているときに、突然人の騒ぐ声が入ってくると、どんな博愛的な人道主義者でも殺意が起きるかもしれない。相手を沈

黙させ、自分の耳の安静を保つことができないのを悔しがらるはずだ。禽獣の鳴き声、風涛の音などが静けさと一体になれることは古代の詩人がすでに悟っている。『詩経』の「肅々馬鳴、悠々旌旗」とは「有音無声」、つまり馬がいなくだけで、人の叫び声が無ければ騒がしくは感じないということだ。『顔氏家訓』には「蝉噪林愈静、鳥鳴山更幽」（せみの声、森ますますの静寂を感じ、鳥鳴けば山さらに幽玄なり）これも「有音無声」の感じであり、虫鳥の鳴き声がかえって静かさを深めるのである。シェリーは『To Jane—A Recollection』の中で、キツツキの木をつつく音が、森をさらに静かに感じさせる、と歌っている。コールリッジの『アイオリス人のハープ』は「海の音は遠くて奥深い、よって静けさを告げる」と言っている。もしこの海が人海だったら、詩人はきつと耳を覆い、頭を痛くするだろう。だから、人間の喧しい声を「カラスやスズメの鳴き声」に譬えるのは、人間の声を弁護する言い方である。女性たちの談笑を「鶯の囀り、燕の囁き」に譬えるのは、まったく鳥類に対する冒瀆である。

静寂は音がないのではない。音がないのは死であり、静ではない。だから、ダンテは、地獄では太陽でさえ静かになる、と言っている。がらんどうは視覚の静寂であるように、静寂は聴覚の透明状態と言える。寂寥は普段聞こえない音を人々に聞こえさせ、道徳家に良心の囁きを聞こえさせ、詩人に夕暮れの移り変わりの気配、また青草の成長音を聞かせる。喧騒をたくさん聞くほど、清らかな声音が聞こえなくなる。人間は賑やかなのが好きだから、集まった時に黙って何もしゃべらないと、かえって不自然である。たとえば、会議開始5分前の沈黙、久し振りに逢う親戚や友人の手を握って言葉が出ない時、この沈黙には胎児を身ごもっているような声なき動きが隠れている。

人の声にはまだほかに恐るべき点がある。車馬などの騒音なら、人間と同じ平面におり、人間の周囲で騒ぐだけだが、人間の騒ぐ声は人の頭の真上に来る場合もある。例えて言えば、あなたが階下、人が階上にいて、ただ足音であっても、それが、頭の真上での騒ぎなら『紅樓夢』の趙夫人の言ったような、頭を蹴りつけられたような感じがする。我慢できなくなる度に願うことは二つある。一つは階下に住む人が『山海経』にある「刑天之民」に変身し、頭が胸の下に付いていれば、真っ先に階上の住人の革靴に踏まれずに済むことを願う。もう一つは、階上に住む人が、キリスト教の天使のように背丈は腰ぐらいまでしか伸びず、背中に羽が付き、両足で歩かなくても良いことを願う。階上の人に孫臍のような足を切る苦痛を味わわせたくない願うあなたは本当に優しい。彼があなたの頭を考慮したこともないのに。あなたの頭を考慮したのはローデンバッハの言う「騒音で損傷された魂」なのだ。

賑やかさと暑さ、静かさと冷たさは相互に関連し合っている。凄惨な地獄にいれば太陽でさえ寂寥に感じてしまう。人間が賑やかに喋れば、寒い部屋でも熱い鍋のように感じら

れ、じっとしてられない。アルトゥル・ショーペンハウアーは『哲学小品集』第278節の中で、思想家は耳を聞こえなくさせるべきと言っている。それは理にかなっている。耳が聞こえていれば、必ず音が入る。音が賑やかなほど、頭の冷静さが保ちにくくなり、思想も公平でなくなり、替わりに偏見が生まれてくるわけである。その時、あなた自身も騒ぐことのできる動物であることを忘れてしまう。あなたも以前階下にいる人の頭を踏みつけたこともあるし、騒がしくて隣人が思考も睡眠もできない状態にさせたこともある。あなたは強い偏見を持っていると批判されているのも顧みず、また新たな偏見を増やしていくのだ。人生という本の縁に新たな一筆が加わる。

## 文盲について

非文学的な書物の中から意味深い妙句を見つけた時、まるで、古い服を片付けていたら、内ポケットから使い残した紙幣とコインを見つけたようで、自分のものだと分かっているが、意外な喜びを覚えるものである。三年前ハルトマンの『倫理学』を無意識にめくっていたら、素晴らしい一節を見つけた。それは、一部の人は理非曲直の分別ができず、まるで白黒の分からない色盲のようであり、価値盲という病に罹っているという文であった。この譬えは絶妙で新鮮味があったと当時思っていたが、この小文に引用するとは思わなかった。哲学の大家（おまけにドイツ人）の言葉は小品のまくらに引用するには役不足で、まるで高射砲で蚊を打つようなものである。しかし、小さいテーマを大きにしないことには、読んでくれる人がいないだろう。小店舗のオープン時や小学校の開校式に地方のお偉方に出席していただいたり、無名人の本を出版する際、有名人に題字や序を書いてもらったりするのも同じ考えである。

美意識の欠如は価値盲の象徴である。文学を鑑賞する力がゼロに近い。この症状を色盲の例から類推して文盲と呼んでも差し支えないと思う。この点について、蘇東波も私と同じである。蘇東波が科挙に合格し、李方叔が落第した時、蘇東波は彼に詩を送った。「与君相从非一日，笔势翩翩疑可识；平时漫说古战场，过眼终迷日五色。」（君との付き合いは長く、筆跡からも大体あなたと分かる。普段は昔のことをとうとうと喋るが、結局あなたの筆跡が読めなかった。）ところが、不思議なことに、文学を職業とする人ほど文盲の程度がひどい。多くの文学研究者には詩の美醜、質の高低を鑑賞、鑑別する力がまったくない。しかし、少し視野を広めて見れば、それは別に不思議なことでもない。文学を読んでも鑑賞ができない人は、あたかも皇帝の後宮を見守る宦官が毎日大勢の女性たちと一緒にいて、チャンスがあっても能力がないのと同じである。間違いがなければ話にならない。カタキ同士は良く出会うものだ。そうでなければ人生の喜劇があるわけがない。

文盲という言葉は実に素晴らしい。それは教育者からいただくべきである。文字が読めても、文盲でないとは言えないからである。たとえば、言語学者や文字学者より文字を沢山読める人が世にいるのだろうか。何人かの文字言語学者が文学作品を読むと、しばしば黒煙や悪臭が立ち込めた中に入ったように眼の前が真っ暗になる。ある言語学者は「文学批評はくだらない話ばかりだ。一つ一つの文字にこそ形、意味、音韻が入っていて、実在性がある」と言っている。それを拝聴して、思わずガリバーが巨人の国で皇后さまの胸を拝見した時、皮膚が見えず毛穴しか見えなかった話を思い出した。もしも蠅が文字を読めるならば、——『晋書・苻堅載記』を基にすれば、読めると思うが——もし蠅は文字が読めるのならば、蠅の見解はその言語学者と同じになると思う。瞳が小さいから視野も広くないだろう。詩を読む時一つ一つの文字しか見えぬ、人物を見る時も毛穴しか見えない。蠅には宇宙観があり、詩趣に富んでいると私は率直に認める。ブレイクの言う、「一花一世界、一砂一天国」の度量を蠅は持っている。蠅は骨の山から金銀島を発見でき、ゴミからゴミへ飛ぶ時、アジアからヨーロッパへの長距離飛行の楽しさが味わえる。骨のほかには楽土がない、ゴミのほかには五大陸がないと思わない限り、蠅をブンブンと好きなように飛ばせておこう。訓話音韻学はもつとも役に立ち、もつとも面白い学問ではあるが、ただ研究者の頭が清朝の朴学（清代に盛行した考証学）の遺物なら困る。朴学以外に学問がなく、文学研究は文字などの校訂にすぎないと思っているから。朴学者の威張り様は恐ろしい。サント＝ブーブは『月曜閑談』第6冊で言葉を覚えたのに、文学が鑑賞できず、もつぱら文字学に腕をみかくのは、まるでお嬢様に求愛して失敗し、仕方なく侍女に求愛するのと同じ、としている。侍女に好意を示すと、彼女が主人より上に立とうとするから、かかわってはいけない。襲人（『紅樓夢』の中の侍女）を見習いたくない侍女はいないだろう。

色盲は絵を描くことをしないが、文盲は文学を語る。それに、たいへん熱心である。そこで、印象主義的で、自我表現を呼び覚ました創造的な文学批評が生まれた。文学鑑賞はもちろん印象から離れられないが、印象がどうして自我表現になれるのか、私には分からない。一般的に言えば、印象は鑑賞される作品の表現で、鑑賞者自身の表現とは言えない。それに、印象は作品から受けたものであって、鑑賞者の創造にはならない。印象創造派が文学を語るとたいへん賑やかになる。美的センスが欠けているから文章がげげげしい。その中に精神分析派の言う補償的心理が働いているかどうかは妄言できない。その人は怒鳴ったり、叫んだり、甚だしくは何も言わず黙り込んでしまい、気絶してしまう——これこそ「無言の美」の境地である。彼は分析しない——そのことには誰も耐えられない。彼は判断をしない——たいへん世事にうとい。インスピレーションやら、純粹やら、真理やら、人生やら、たくさん名詞を濫用する。おおげさな名詞を使うことは、あたかも小額の借金をしないのが豪快さの象徴だと思っているからである。「印象」は少なくないが、腐

るほど陳腐な比喩をたくさん使っている。仮に彼がシェリーについて論文を書いたら、文章の中にシェリーの姿は見当たらず、燃えている炎をだらだらと書き、吹きすさぶ風を長々と描き、さらに、自由気ままに飛ぶヒバリを浮き彫りにするのである。この三つが合わされば、シェリー像が出来上がるそうだ。何ゆえであろうか？ 風が火を吹き消せず、火がヒバリを焼かずに済むのは奇跡に過ぎない。だから、「彼の生命は美しい詩の如く」という句を見たら、その後いきなり決めて美しいとは言えない詩的な散文が続く。この類の文芸鑑賞は「創造」または「印象主義」的批評と称するには妥当性が欠けている。それを一文字ずつ変えてみよう。つまり、「創造的」を「捏造的」に変え、「捏」からは鼻を捻って夢を見る意味をみとるのだ。「造」は壁に向かってでっちあげ、という意味にとる。「印象派」に至っては、「群盲象をなでる」の諺から「触象派」に改めたらどうだろう。文盲にぴったりだろう。

捏造派は最初から芸術鑑賞に価値の鑑別が存在しているのを否定している。自分の嗜好に合えば良いものとし、そうでないものを否定してしまう。文盲は価値盲の一種であることはこの点においてははっきり分かる。あるモダンな貴婦人が有名画家のホイッスラーに「私には何が良いものかが良く分からない。何が好きかしか分からない」と言った。そこで、ホイッスラーは「マダム、この点においてはあなたの見解は野獣と同じでございます」と深々と頭を下げて言った。まったくそのとおりだと思う。文明人と野獣との区別は、人類が自己を超越した観点を持つことにある。それによって、是非真偽を己の利害と切り離し、善悪美醜を己の愛憎と切り離すことができるのである。そして、日常の生活と分離不可能なほど密着させず、できるだけ己の凡俗な身から飛び出て批判をする。だから、実用と対応の他に真理が存在すること、教育と投稿の他に学問があること、映画スターの写真を見る他に崇高な美術が存在すること、命を大切にする他に殉国殉教の尊さがあることなど、一連のことを知っているのである。人間だから、間違いを犯すのは免れないことである。食べてはいけない果物を食べたり、愛する値打ちのないものを愛したりしてしまう。しかし、心にはすでに比較判断の基準があるから、自己弁護のために是非を転倒し、善し悪しを混淆することはしない。するべきことが必ずしもやりたい事ではない事は解っている。この種の自我の分裂、知行の不一致は、心が張り詰めているときは悲劇を生み、くつろいでいる時は風刺となる。禽獣だけが生まれつきの知行合一なのである。己の欲望よりもっと高い理想があるのを知らないからである。苦勞してようやく猿から人間に進化してきたのに、嗜好を価値と混同し、人面獣心になることはダーウィンに申し訳ないではないか。

文学を憎んでいる人は、目に障りがあるから見えるわけがない。しかし、目は悪いが、嗅覚はきわめて利いていると思う。何故なら文人の雰囲気嫌いだと言っているから。「足を与えられたものは角が取りさられ、翼を与えられたものは歯を奪われた」。造物主の公平

さに我々は絶えることのない称賛を送るしかない。

## 文人について

文人は奨励すべきである。というのは、文人は謙虚で、向上心があり、身分も要求せず、本分にも尽くさないからである。文人は自分のことを、他人の評価よりずいぶん低く見ているし、自分が文人であることを悔やんでいる。それで、体力、時間と紙を費やして自分が文人になりたくないことを証明しつづけている。文人であることに不満な人は、このご時世において時の情勢に明るい俊傑と言わなければ何と言ったらいだろうか？

文人とは、一般的に言えば、投稿する人や、著書を出したり、文章を書いたりする人のことを指すが、実際、文人という言葉は、詩、散文、小説、戯曲のようなものを書く者に限るべきである。いわゆる古人の言う「詞章（詩・詞・賦・駢文・雑文などを含めた通称）家」、「無用文人」、「いざ文人となれば、たいした観点を持たなくなる」と言った文人のことである。空文を書かず、実学的な社会科学や自然科学に明るい専門家に至っては、膨大な文章をすらすらと書き、発表しているが、文人と気取るに値しない——武人になる資格はないにもかかわらずである。文人として気取らないのは己を知る力があるからかもしれない。白い紙に黒い文字を書いたら、文章になるとは限らない。有用さから言えば、二種類に分けられる。一つは廃物の再利用である。たとえば、牛糞は燃料にすることができる。また、陶侃が言ったような竹の切れ端や木屑は皆有用である。もう一つは日常の必需品である。たとえば、歯ブラシやトイレ用品などは我々にとって、王子猷が竹を愛するように「一日も欠かしてはいけない」のである。世間の事物は使い道がこんなに広いのに、文人だけが「無用」の称号を頂き、竹の半端、木屑、歯ブラシ、トイレ用品にも及ばないと嘆いている。気の毒ではないか。文人と区別するために、有用な人物には名をつけてもいい。たとえば「用人」と称したらどうだろう。「用人」の二文字は「有用人物」の略語で、文人の二文字につり合うではないか。この簡略化した混成名詞は、乳母、侍女、貸し切りの車夫（注：これらは中国語ではみな「用人」という）に独占させるべきではない。また、この名詞には二つの利点がある。第一に、それは民主的平等精神に溢れている。専門家や顧問も使用人と同じ肩書きを用い、同じラインに立つ。第二には、中国を全面西洋化する原則に背かない。アメリカのある大統領は「国民の公僕」、つまり、皆に仕える使用人と自称しているようである。ローマ教皇は自分のことを「奴隷の奴隷」あるいは、「使用人の使用人」とへりくだっている。フランス革命の時、党に所属している人達は使用人のことを「使用人兄弟よ」と呼んでいる。大統領は君主に当たり、教皇は父親に当たるが、その欧米では「使用人」と連体感を持つ呼称を使っている。中国もそれに見習うべきだ。

用人が文人を軽蔑するのは昔からのことであって、別に今に始まったことではない。たとえば『漢高祖本記』に漢帝が文学を好まないとの記載があり、また『陸賈列伝』は高祖の口を借りて自分の本音を「馬上にあつて天下を取る、詩と書に關係あるのか？」と述べている。実に簡単明瞭で至上の名言だ。さすが建国の帝である。古代から現在まで文学に反対する人はいろいろなことを言っているが、結局、漢帝の言うことと同じ意味に過ぎない。「馬上にいる」という言葉は抗日戦争の時に読むとさらに身近に感じて味わいがある。プラトンも『国家』の中で詩人文人を排斥しているが、これほどきつぱりした口調があるだろうか。プラトンも詩趣に富んでいるが、漢高祖は詩興が湧いた時『大風歌』を詠んだことがある。この二人でさえ詩詞を軽蔑して顧みないのだから、低俗で健全な霊長類はおさらだろう。テオフィル・ゴージェは『奇人志』(Les Grotesques)の中で、商人や金持ちは「畏詩症」という変な病気にかかりやすい、と言っている。病気の症状は以下のようだ。金持ちは息子の机の引き出しを開けて、なにやらいっぱい字を書いた紙を発見する、それは簿記でもなければ、帳簿でもない。各行の頭字は大文字を使い、末尾が見えない。細かく見れば、詩の原稿だと分かった。それで怒髪天を突き、胸が張り裂けるほど悲しくなり、家にこんな親不孝な子がいることを悔しがり、神経に異常を来たすのである。この病気は原因が珍しいだけでなく、伝染力がすこぶる強い。このようなご時世になると、まるで夏のコレラ、冬のインフルエンザの様に蔓延する。薬と言えば、一つあるそうだ。それは古今東西の詩をすべて火に投げ込み、その灰を飲むこと。こうすれば胸の中の鬱憤がたちまち晴れ、目の中のものもらいも無くなるのである。そして、これにより、「国強民富」、政治賢明公平、武力増強に至るのである。現在の人がこの様に見識の広い言論ができれば、とうの昔にいろんな刊行物に発表され、人々が先を争って読むに違いない。

文学は必ず壊滅させなければならない。けれども文人は奨励しても良い。奨励する理由は、文人が文人になろうとしないからだ。教皇が口を開くと文章になり、白居易には知らないことがない。このようなどうしようもない天才はあくまでも少数である。一般の文人に至っては、好きでもないし、得意でもない。彼らが文学をもてあそぶのは、まるで古い小説の中で、良家の娘が売春するのと同じく、やむを得ないことだそう。彼らに救いの手が差し出されさえすれば、すぐに読書を止め、筆を捨て職業を変えるのである。文学を仕事とするはもっとも不運で、甲斐性がなく、貧困と隣り合わせで、疾病もついてくる。文人が乞食に成り下がることは聞いたことがあるが、理、工、法、商から乞食になることは今までなかった。大ばか者、ほかに道がない者を除いて、詩や小説を職業にする人は断じていない。だから、ほかの人が文学と文学者を蔑むだけではなく、文人自身も劣等感に溢れ、文学に対して信仰も敬愛心も全く持っていない。たとえば、文人気取りの楊雄は『法言』の中で「ますらおは彫刻詩文をやらない」と言った。つまり、彼は壮丁になっても文

## 人生という本の余白に書き込む（続き）

人にはなろうとしなかった。そこで、ある特別の現象が現れた。つまり、ほかの学者が威風堂々、意気揚々と十二分の自信を持って自分の専攻を宣伝するのに、文人だけが下心ありげに笑いながら、申し訳なさそうに物を言う。たまに法螺を吹いても、「国難文学」や「宣伝の武器」などしか語らない。それも、皮が濡れた太鼓のように叩いても響かない。ゲーテは愛国詩を書かなかつたから罵倒された。彼は『エッカーマンとの対話』の中で、兵士でもなく、前線にも行っていないのに、書齋にいただけでどうして勇ましい喚声をあげた戦いの詩が書けるのだ、と不平をもらした。少数の文人が英雄の出やすい時勢下で戦略や政論を論じ、陳述書も書き、さもなければ、自ら師になろうとし、民を勧告するのである。この様な多才多芸な人が文学に埋没するのは実にもったいない。職種を変える機会さえあれば、彼らはすぐに文芸を捨て、転業してよいのだ。

シェリーは『詩の弁護』の中で、文人は「人類の立法者」だと言い、カーライルは『英雄崇拜論』の中で、文人は「英雄」だと言い得る、と言っている。その特殊な材料でできた文人たちは英雄になりたがっているし、律法者や他の何かになるのを希望している。自らのことを英雄や立法者と称する者には物事をおおげさに言う癖がある。立法者や英雄になりたいのなら、向上心があることにしておこう。向上心のある者は奨励すべきである。上を志すことは、現実の地位に不満または恥辱を感じている表れである。恥を知ることは勇に近い。ましてこんなご時世である、勇を奨励すべきではないか。

要するに、我々は文学を壊滅させ、文人を奨励し、文人が文人を止めること、文学を止めることを奨励すべきである。